

YPP2008

2008 年度ヤングサイコロジストプログラム (YPP2008)

抄録集

開催日 2008 年 11 月 14 日 (金)

於 お茶の水女子大学

企画・運営 ヤングサイコロジストプログラム (YPP) 運営委員会

主催 日本パーソナリティ心理学会広報委員会

YPP2008 についてのご案内

企画趣旨

この企画は、若手研究者が自分のおこなっている研究についての議論や質問をおこなう場を提供し、若手研究者同士の交流を促進することを目的としています。

発表を希望される方は、直近に実施した最新の研究の反応をみるという使い方をしていただいても結構ですし、これまでに発表した研究を異なる観点からもう少し掘り下げて議論していただいても結構です。また、既に完成した研究ではなく、現在進行中の研究について、これから実験や調査などをおこなう際の実施方法や、分析方法についての質問を出し、それらに対するアドバイスをもらうこともできます。「今までおこなってきた研究テーマについて、若干別の領域からの視点でアプローチしてみたい。しかし、どうもよくわからない部分がある。周りにはその領域について詳しい人がいない・・・」といった方にもお薦めです。イメージとしては、学内でおこなわれているゼミを全国版に広げたようなものといえるかもしれません。

このほかに「せっかく大会に来たのだから多くの人の話を聞きたい」「他大学や他領域の人たちと知り合いたい」または「せっかく前日入りするのだから有意義に時間を使いたい」「一人で飲むのもちょっとおもしろくない」といった方、ぜひとも積極的に参加いただけたらと思います。

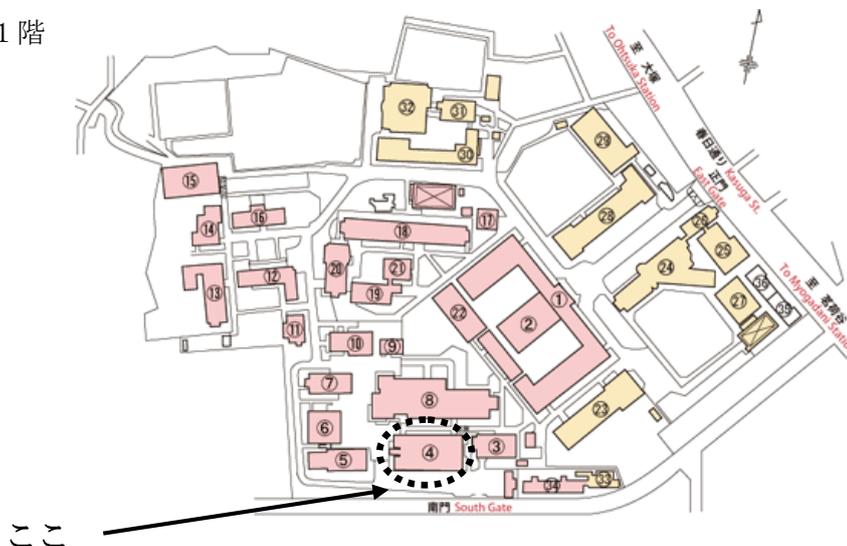
おなじパーソナリティを専門にしても、少しテーマが違えば、あまり議論することもなく、過ぎてしまいます。ある程度同じ立場の人同士で、普段はなかなかできない議論をしてみませんか？

日時

2008年11月14日(大会前日) 15時～18時

場所

お茶の水女子大学
文教育学部1号館1階
第1会議室



参加費

無料（飲み物付き！ご当地のお菓子の持ち込みは大歓迎！）

懇親会

終了後には、懇親会も企画しております。ふるってご参加ください。なお、会場近くで予定しております。

参加資格

日本パーソナリティ心理学会会員に限る。

学部または大学院に在籍している学生、もしくは学部卒業または大学院修了（退学含む）5年以内の方。

タイムテーブル

- 15:00～ 開会の言葉
15:05～ 参加者自己紹介
15:20～ 研究発表 1
「教室授業場面における教師の指名行動に関する一検討」 澤邊潤
15:50～ 研究発表 2
「色彩への反応性と外向性との関係について」 安田傑
16:20～ 休憩
16:40～ 研究発表 3
「統合失調型人格障害と QoL および学業状況との関連性について」 伊藤慎也
17:10～ 研究発表 4
「自尊感情の高さの指標に関する検討」 阿部美帆
17:40～ 新企画
「研究生生活 Q&A」
17:55～ 閉会の言葉
18:00～ 移動
18:30～ 懇親会
-

抄 録

研究発表 1

「教室授業場面における教師の指名行動に関する一検討」

澤邊潤（早稲田大学大学院人間科学研究科）

昨年は、子どもの挙手行動に焦点をあて、先行研究の追試から挙手研究における質問紙研究の限界と可能性について検討した。しかし、教室授業場面は子どもと教師の相互作用場面であることを踏まえると、子ども側に焦点をあてた研究だけでは十分とはいえない。本発表では、子どもの挙手行動にかかわる教師の行動として、教師の指名行動に焦点をあてる。

本発表の目的は、教師の「指名行動の偏り」に注目し、指名行動の特徴を検討することである。具体的には、「指名頻度」という明示的なデータを用いた相関分析によって指名行動の傾向を検討した。その結果、分析対象（1年生～5年生）のほぼすべての学年で中程度の相関（相関係数.448～.713）が認められた。また、児童の挙手回数と教師の指名回数の相関分析を行った結果、高い相関（相関係数.805～.923）が認められた。以上より、教師の指名行動にはある程度偏りが生じており、挙手している児童に指名する傾向があることが示唆された。

研究発表 2

「色彩への反応性と外向性との関係について」

安田傑（関西学院大学大学院文学研究科博士課程）

これまで、カラーストロープテストや色彩形態検査を用いた研究によって、「色彩への反応性と外向性との間には関連が見られる」という知見が得られており、現在でも一部の投影法ではこの関連性を根拠としたパーソナリティ測定が行われている。しかし、このような色彩への反応性と外向性との間に何故関連性が見られるかについては、色彩の感情的意味性に基づく仮説、色彩知覚の即時性に基づく仮説、刺激希求性に基づく仮説などが提唱されてきたものの、全て仮説の域を出ず、未だ関連性を解明するには至っていない。そこで本発表では、これまでの色彩－外向性研究を概観した上で、各種仮説を実証するための研究法について検討し、その際の問題点などについて議論したいと考えている。

研究発表 3

「統合失調型人格障害と QoL および学業状況との関連性について」

伊藤慎也（日本大学大学院文学研究科）

統合失調型人格障害は、統合失調症の前駆段階として数多くの研究がなされてきたが、人格障害であるために重症度が軽いと理解され、その社会的影響は注目されてこなかった。しかし、統合失調型人格障害は 10% という高い自殺率や成績不振などを示し、社会に及ぼす影響が大きい。そのため、統合失調型人格障害への早期介入は重要な課題であると考えられる。しかし、我が国においては統合失調型人格障害の社会的影響の程度を調査した研究は存在しない。以上の概観より、(a) 統合失調型人格障害の早期介入の対策を立てる必要性を実証し、(b) どの程度の人が早期介入を必要としているのかを検討する必要があると考えられる。本研究では、統合失調型人格障害が顕在化しやすい学生を対象に、統合失調型人格障害のスクリーニング尺度を実施し、統合失調型と疑われる学生は生活の質が低く、学業に困難を示しているかを検討する。今回は研究計画までの発表予定である。

研究発表 4

「自尊感情の高さの指標に関する検討」

阿部美帆（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

近年では、自尊感情はその高さの変動性の2側面から捉えられるようになった（Kernis et al., 1989）。自尊感情の高さとは個人の特性的な自尊感情の高さであり、自尊感情の変動性とは、短期間の自己に対する評価の変化のしやすさである。自尊感情の2側面に注目した研究においては、同一対象者に短期間に連続して複数回自尊感情の測定を実施し、算出される個人内平均値と個人内標準偏差を、それぞれ自尊感情の高さ（状態平均）および変動性の指標としている。また、自尊感情の高さについては、1回の質問紙調査において自尊感情尺度を実施し、算出される自尊感情得点（特性自尊感情）も分析に用いられており、自尊感情の高さについては2つの指標が存在する。しかし、両指標の違いについては検討されていない。本発表では、発表者のこれまでの研究知見を概観し、自尊感情の高さの2つの指標の違いについて、議論したい。

研究生活 Q&A

新企画です。皆様が日ごろ感じておられる、研究や研究生活もろもろの疑問を事前に皆

様に出し合っていたいただき、当日研究発表終了後に当運営委員会で選考した疑問を提示し、フロアから回答を出し合って、皆様の更なる交流の促進を目指したいと考えています。

参加者一覧（予約申し込み）

阿部美帆 ^a	筑波大学大学院人間総合科学研究科
青林唯	千葉大学大学院
安藤有美	名古屋大学大学院教育発達科学研究科
本田周二	東洋大学大学院博士後期課程
稲川 義浩	東洋大学大学院社会学研究科
井上美沙	駒澤大学大学院人文科学研究科修士課程
伊藤慎也 ^a	日本大学大学院文学研究科
亀石由貴	早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程
古村健太郎	北海道教育大学大学院
栢澤福太郎	東洋大学大学院社会学研究科博士前期課程
佐藤 史緒	東洋大学大学院社会学研究科
澤邊潤 ^a	早稲田大学大学院人間科学研究科
下青木田鶴子	駒澤大学大学院人文科学研究科修士課程
鈴木公啓	明治学院大学非常勤講師
友野隆成	同志社大学文学部
山田幸恵	岩手県立大学社会福祉学部
安田傑 ^a	関西学院大学大学院文学研究科博士課程
結城 裕也	東洋大学大学院社会学研究科

（敬称略，アルファベット順）

注 a：研究発表者

YPP2008 には、日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会準備委員会より多大なご支援をいただきました。心から感謝の意を表します。

2008 年度ヤングサイコロジストプログラム運営委員会

友野隆成	（同志社大学文学部）
本田周二	（東洋大学大学院博士後期課程）
井上美沙	（駒澤大学大学院人文科学研究科修士課程）
青林唯	（千葉大学大学院）
鈴木公啓	（明治学院大学非常勤講師）

問い合わせ先 jspp.wk@gmail.com
 URL http://wwwsoc.nii.ac.jp/jspp/shinpo/wk_h20.html